

青森市と蓬田村との境界付近、JR津軽線中沢駅の近く、青森市四戸橋磯部64にかつて青森工業高等学校後潟分校があった(以下、「後潟分校」と略記)。後潟分校は定時制の学校で、1951(昭和26)年10月1日に開校し、27年後に閉校となるまで429名の卒業生を輩出した。

「学校教育法」の公布から1年間の準備期間を経て

新制高等学校が発足した。これによって1948(昭和23)年4月1日、青森県立青森工業学校は高等学校となり、校名も青森県立工業高等学校と改称した。さらに5月1日には定時制課程設置が認可され、6月に中心校、蟹田分校、高田分校、今別分校の四つの定時制課程が発足した(短期間ではあるが横内分校も存在した)。修業年限

は4年で、中心校には普通科と工業科、各分校には普通科が設置された。

そして、3年を経て後潟村・奥内村・蓬田村三村組合立の後潟分校が認可され、普通科が設置された。さらに3年後には家庭科別科設置となつている。校舎は後潟中学校に併置されることになるが、「独立校舎」を持つことが課題であり関係

月に発生した十勝沖地震で南側の校舎が使用不要となり、新築の必要があったようだ。そこで、教室の移築が発案されたのだろう。ただし、建築が始まってからの資料は「移築」ではなく、「新築」となつているので、実現しなかつたとみられる。そして翌年12月8日、ついに新しい校舎の落成式が執り行われた。落成記念誌

に目をやると、鈴木小学校長は「最後に、虫のよすぎる話ではありますが、体育館を欲しゅうございます」とさらなる施設の充実を求めていた。ところで、後潟分校に通う生徒が学ぶ教科は、普通科では国語・社会・数学・理科・保健体育・芸術・外国語、そして「農業」だった。また、別科科(家庭)は国語・社会(倫理)・保健、家庭だった。また、定時制の学校なので生徒は昼間働いていて、その職種は普通科の生徒(すべて男子)の実に80パーセントが農業従事者であった

というデータがある。ここに、後潟分校が工業高校の分校であっても工業科は置かず、普通科だった理由が見えてくる。

実際、独立校舎の建築を求めたPTA会長らの陳情書において、後潟分校は「農業地域の勤労学徒を収容」するもので、卒業後は「農業後継者」として「良識ある社会人」となる人材を育成する教育機関であると述べていた。つまり、後潟分校は「農業地域の高等教育機関」という役割を担っていたのである。それは、ほかの分校でもおなじだったろう。

ただ一方で、「社会の変化とともに次第に入学を希望する生徒が少なくなり、分校が閉鎖されたのは悲しいことではあるが当然の帰結とも言える」(『蛍雪五十年』)という卒業生の言葉があるように、後潟分校はその歴史に幕を閉じ、跡地には記念碑が建てられた。それから40年以上の時が過ぎた。

# 落成記念誌

青森県立青森工業高等学校 後潟分校



(昭和44年12月8日)

校歌  
作詞 奥村 三郎  
作曲 奥村 三郎  
一、天をかくる  
道徳の道  
人あひむすんで  
千草をわけて  
二、津波の波  
いなきまに  
すこやかなる身  
高き枝を  
三、見はるかす  
かがよき  
うらやましい  
工のわざ  
四、かきこむ  
心  
新なる生  
通たいま

## 農業地域の高等教育機関 〜青森県立工業高校後潟分校〜

工藤 大輔

(青森市民図書館  
歴史資料室室長)

者の願いでもあった。

1968(昭和43)年8月2日開催の学校組合議会議員協議会の資料によれば、校舎は新築ではなく「移築」で協議会に諮られていた。ここでいう「移築」とは、青森市立浦町小学校の校舎から6教室分を解体して後潟分校の校舎として移築するということだった。

浦町小学校は、この年5

東京と青森 648号  
東京青森県人会 2022年4月

後潟分校落成記念誌(表紙)  
11969(昭和44)年12月・青森市民図書館歴史資料室所蔵